

兵庫県阪神北県民局 阪神農業改良普及センター

## 新規就農希望者が増えている 緑豊かで人も優しい三田市で始めませんか？



「子どもが生まれたので、安心安全な有機野菜などを栽培しながらのんびりと子育てがしたい」「定年後は空気の綺麗な田舎に引っ越し、農業をやるのが夢だった」「都会の生活に疲れたので田舎で農業でもしながらスローライフを楽しみたい」…

農業に対するイメージは人それぞれ。あまり実情を知らずに憧れを抱く人も多い。一方、阪神間は山間部の農業地帯から、南部の都市に点在する都市型農業まで、バラエティ豊かな農業が存在するのも事実だ。

三田市の兵庫県三田庁舎内にある、阪神農業改良普及センターは、地域就農支援センターを兼務しており、新規就農希望者に対し、ヒアリングをして就農に必要なあらゆる事柄を説明し、その人にあった就農方法とそれを実現させる道筋について相談できる窓口だ。

センターの農政専門員、三宅元一さんにお話を聞いた。

コロナ感染の広がり、農業に興味を持つ人は増えている



「農業の担い手が減る一方で、別の職業からの参入希望者は増えています。昨年の相談件数は50件以上で、例年の2倍の数です」

ただ、どんなイメージを持って相談に来ているかは人によってバラバラだという。

週末だけ農業を楽しみたいという趣味的な農業を求める人には、市民農園や農業講習会などを紹介する。農家へのインターンシップを薦める場合もある。



もっと本格的に農業を始めたい人には、それなりに農業の勉強をしてもらわなくてはならない。始めるには農地や機械などの先行投資が必要だし、職業として農業を成り立たせるには、それなりの技術が必要だ。各種入門講座等で基礎を学ぶだけでなく、地元の経験豊かな先輩農家の元で、実践しながら勉強することを推奨している。

そういった先輩農家は「親方」と呼ばれ、新規就農者の後見人的な役割を果たす。農業技術だけでなく、他の農家との付き合いかたや、地域のしきたり、農業者としての礼儀など、様々なことを教え、新規就農者がうまく地域に溶け込めるように手伝ってくれる。就農後も何かあったときに助けてくれる「親方」の存在は貴重だ。

親方が、忙しい中そのような役目を担ってくれるのは、やはり農業の担い手を育成する必要性を感じているからだ。

## 就農するなら、若い方が有利

最近の希望者は30代、40代の人が多いという。各種支援制度をとってみても、年齢制限があることが多いので、就農を考えるなら早ければ早い方がいいと三宅さんは言う。



例えば「青年等就農計画」を作成し、市町の審査を通過して「認定新規就農者」になると、国や県、市町から様々な支援が受けられるが、認定新規就農者になれるのは、原則45歳未満の人だ。

認定新規就農者で一定の要件を満たせば、経営を始めて間もない時期の所得確保を支援する経営開始資金（旧農業次世代人材投資資金（経営開始型））の交付も受けられるが、その上限年齢も原則49歳だ。

農地は簡単には取得できないし、市街化区域の農地に関しては、生産緑地法など法律の縛りもある。先輩農家や公共の制度をうまく利用しながらでなければ、スタートするのさえ難しそうだ。

## 農業の楽しさを伝えたい

三田市でひとときわ頼りにされている親方農家さんがいる。株式会社おおにし農園の大西則和さんだ。かつては農業が盛んだった三田市下深田で、三田産の野菜を守るために頑張る一方、たくさんの新規就農者を育ててきた。



「初めは、知り合いから、農業したい子がおるから面倒見て、と頼まれたのです。その子から噂が広がり、次々と人が来るようになりました。インターンシップや週末講習など細かい実習生を含めると数えきれない人を指導していますが、農家としてきちんと巣立った人は7人くらいです」

大西さんがお忙しい中、後継者育成に力を入れているのはなぜかと聞いた。

「やはり、自分も農業の楽しさを知っているので、『やりたい』と言ってくる人の気持ちは大事にしたいのです」

全くの未経験者が大西さんの門を叩き、独立するまでには少なくとも2年は修行が必要だという。

近所の農家から休耕地になっている土地の借り手などの相談を受けている大西さんは、新規就農者にそういった土地を世話したり、就農直後のお金のない時期に機械を貸してくれたら、就農後も何かと面倒を見ている。



大西さんから巣立ち、近所で農家をしている門下生の徳毛小春（とくもこはる）さんが、ふらりと大西さんの畑に見えたので話を伺った。

「寒暖差のある三田市の気候は野菜作りにとても適しています。私は子どもの頃から農業がしたくて、高校、大学と農業科でしたが、大西さんについて実践で学んだことは、学校では学べなかったことばかりで、本当に助かっています。あと三田市は緑が多くて美しいまち。人も優しく大好きです」



ニコニコと徳毛さんの話を聞いていた大西さんは、移住を考えている人に向けてのメッセージとして、

「ぜひ三田市にきて、まずは家庭菜園から始めてみてはどうですか？」と結んだ。

キャプション

<220128\_004>

阪神農業改良普及センターの農政専門員、三宅元一さん

<220128\_011>

農業の担い手が減る一方で、別の職業からの参入希望者は増えている

<220128\_001>

「就農するなら、早ければ早い方が条件はいい」と三宅さん

<220128\_035>

独立するまでには少なくとも2年は修行が必要だという

<220128\_022>

たくさんの新規就農者を育ててきた、株式会社おおにし農園の大西則和さん

<220128\_018>

大西さんの門下生のひとり、徳毛小春さん。